蘇芳集

帚草

高橋さえ子

外燈の明滅に枯れ帚草

鈴鴨や日当る方へ胸揃へ

松韻に浮き上りくる寒緋鯉

冬牡丹日暮れのいろを溜めゐたる

寒月光流木を吹きさらしたる

冴ゆる夜の枕辺に置く漫画本

植込みを灯すと動く初蛙

寒玉子

青山丈

何もないうちに見ておく龍の玉

綿虫の好きな帽子を被つて出る

雪吊の大と小とのいつもかな

数へ日の幾日目かの日暮かな

朝のうち二日のポストまで歩く

小正月とただそれだけの日が落ちる

一つづつ減らぬ日のあり寒玉子

歳旦帖

吉田幸敏

つつがなく東天ありぬ獏枕
残生の遊びせんとや日記買ふ
あまつさへ歳旦帖もメールにて
みめかたちよろしきままに煮凝れよ
病む声と思はざりしが初電話（惇齋藤充さん三句）
鷹の巣を見にゆく約もそのままに
齋きけり藤菜は胸に充ちあふれ

臘梅

小川美知子

読初の長い書名を先づ読みぬ
故郷の方を見てゐる三日かな
人日や二度寝して二度夢を見る
加湿器に水足しながら家にゐる
湯たんぽをふたへに包む雨の音
三寒四温雨やむと雀鳴く
明日あたり咲く臘梅の日差かな

冬木立

木内憲子

湧き出づるときの翳りを冬泉
冬ぬくし窓おほらかに夕日入れ
刻止めてみたき日溜り冬桜
愛日の退く波音を荒立てず
二十日正月ぼんやりと忙しなく
新たとは希望に似たる餅の花
それらしき数もて遠き冬木立

絵地図

小島みつ如

正月の活花庭の小菊足し
除夜の鐘鳴らず漁火かうかうと
初日受く海面まあるくふくらみて
粥柱家系に希有な長寿とか
臘梅の香や水まきて虹生まる
住む町の精しき絵地図買初に
寒肥まく吾老い庭木壮年期

水鳥

清水裕子

水鳥のひとつひとつに水の色
雪吊の嫋やかに揺れ匂ひけり
しばらくを臘梅にをり風を聞く
取り敢へず生けて置きもし紅椿
何かがある冬の鴉が群れをなし
久女忌と思へばすぐに暮るるなり
ひとり居の居間の寒さよ自由とは

父の囃唄

下平直子

夜廻りのよく知る声が門をゆく
純白の卓布の匂ふ初明り
重ねきしふたりの日々や祝箸
初鏡傍への夫の長寿眉
初夢の誰彼のゐて師の在さず
薺打つ欲しきは父の囃唄
明けてゆく空の青さよ凍蝶よ

初夢

冨田正吉

柚子湯出てもとの二人にもどりけり
読初は「朝」といふ名の師の句集
初夢で逢ひたきひとにあひにけり
くちびるが寒いといつて閉ぢにけり
老ゆるとは水のごとしよ寒椿
梅の木の鳥が鳥追ふ寒の入
コロナ禍の朝がまた来る寒卵

迷子

野路斉子

踏めば開く踏まねば開かぬドアに春
春めくや障子の影が人となり
塀際とは梅の匂ひの届く距離
靴一足置かれ人居ぬ梅筵
小さくもクレーン梅の咲く高さ
梅が散る黙つてゐてもゐなくても
野遊びの決まつて迷子何かを摘み